

私が「役の人生」を生き抜くことで 観る人に夢を与えられたら



異空間を生き来する 経験が病みつきに

四半世紀にわたって、ミュージカル界の第一線で活躍し続ける濱田めぐみ。ミュージカルを演じる魅力を探ねると、こんな答えが返ってきた。「よく質問されるんですが……。私はあまりにミュージカルとともに生活をし過ぎていて、よくわからないんです。舞台をやって家に帰って寝て、また舞台に戻っていく。ふたつの世界を行き来しているという感覚ですね。演じるというより、その役の人生を生き抜いて、そしてまた次の役の人生を生き続ける、みたいな」ミュージカルとともに人生を歩ん

できた彼女だが、もともとは声を使った仕事に就きたくて、歌手になりたかったという。宝塚も大好き。

NHKの衛星放送で始まった劇場中継で劇団四季「ミュージカル李香蘭」を観て、ミュージカルという世界に興味を抱いた。そして、中学三年生のとき、初めて生でミュージカル「キャッツ」を観た。

「衝撃を受けましたね。福岡県の小倉から劇場がある博多まで新幹線に乗って、四〜五回は観に行きました。劇場に入った瞬間に世界が変わる、その中毒になってしまったんです。現実の生活が嫌なわけではなかったのですが、異空間に行くことが病みつきになったというか。その行き来をずっとしたいと思ったんですかね。そして、これを職業にできるのかしら？」

高校時代、同級生のほとんどが大進学を目指す中、濱田は「東京に出てミュージカルをやりたい」と言って進路指導室に呼び出された。それでも一年間アルバイトをして貯金し、俳優養成の専門学校へ進学。一九九五年に劇団四季に入団すると、そのわずか三か月後に『美女と野獣』のベル役に。異例の抜擢だった。

演技に没頭することで 客席に一瞬の夢を届ける

その後の活躍は、枚挙にいとまがない。劇団四季の看板女優として数多くの作品に命を吹き込み、退団後もその勢いは止まることを知らない。

役は大小を問わず、どれも同じ深さと強さで印象に残っているというが、自分に最もフィットした役として濱田は『メリー・ポピンズ』のメリーを挙げた。「人間離れた宇宙人っぽさとか、子どもたちとの距離感とか。何をやってもメリーに見える」と演出家の方に言われて。自然にやっていたので、私がつけている資質がはまっていたんでしょね」

一方、しばしばはまり役と評されるのが『アイーダ』のアイーダや『ワイキッド』のエルファバ。「アイーダもエルファバも過酷な人生。舞台上で必死にその世界を生きなければいけない。自意識を持って、かっこつける余裕が一ミリもなかったです。ひたすらがいていたので、皆さんがそこに共感してくださったのかもしれないですね」

ミュージカルを楽しもう!

1996年に劇団四季『美女と野獣』ベル役でデビュー。
在団中、退団後を通して数多くのミュージカルの主役を次々と演じてきた濱田めぐみ。
抜群の歌唱力と演技力で高い人気を誇る彼女にとって、ミュージカルの魅力とは?

text by Motoko Fukuda



濱田が「いちばんフィットした」と語る、
『メリー・ポピンズ』のメリー役
(『メリー・ポピンズ』2018年公演の様子)

©Disney/CML

劇場の中を見てみよう

ミュージカルを楽しもう!

グッズを購入したり、休憩したり

ロビー

エントランスから入場したら、まずはロビーへ。広々としたロビーには待合スペースや売店がある。売店では『オペラ座の怪人』のグッズが買えるので、ファンにとっては見逃せない。

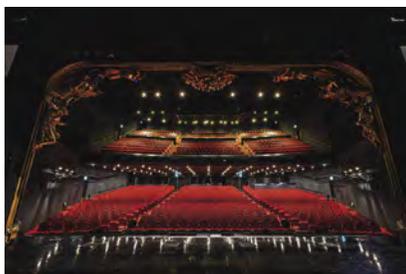


ロビー。奥に売店や2階席へつながる階段がある。

舞台との一体感が味わえる

客席

1階席は舞台を臨場感たっぷりに観劇することができ、2階席は舞台全体が見やすいつくりになっている。『オペラ座の怪人』では物語の中でオペラの舞台シーンが多々あり、客席の観客は自ずと“オペラ座の客”になったような一体感を得られる。



席数は1階と2階を合わせて約1,200席。

これから始まる上演にワクワク!

ステージ

俳優たちが歌い、踊り、物語と一緒にさまざまなシーンが展開するステージ。本格的な彫像が施されたプロセニウムアーチ（額縁状の枠）や、公演が始まると現れる巨大なシャンデリアなど、パリのオペラ座を徹底的に研究したという舞台美術も見どころの一つ。床にも仕掛けがあり、無数のキャンドルが地面から浮かび上がるシーンは圧巻だ。



アンドリュー・ロイド＝ウェバー作曲の大人気ミュージカル『オペラ座の怪人』。撮影：阿部章仁

JR東日本四季劇場 [秋]

JR浜松町駅から徒歩6分ほどのところにある複合施設「WATERS takeshiba (ウォーターズ竹芝)」内に、劇団四季の新拠点として2020年にオープン。JR東日本四季劇場 [春] も同施設内にある。

ミュージカルへの扉をくぐろう

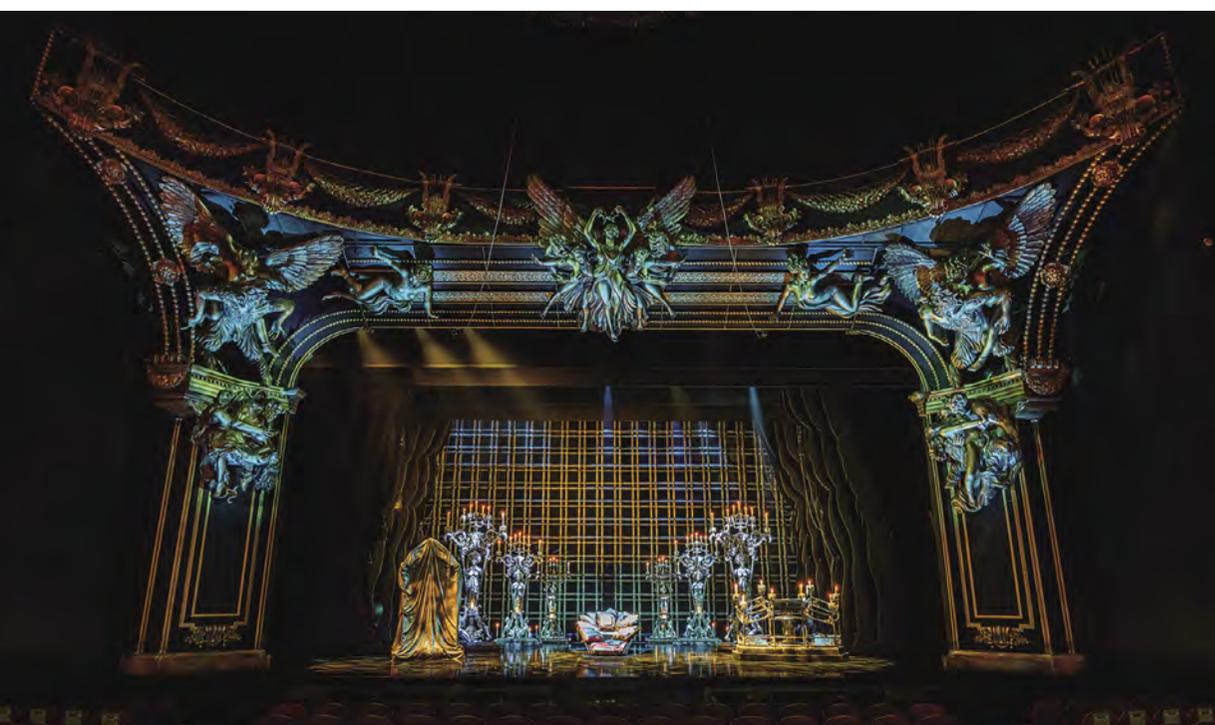
エントランス

「WATERS takeshiba」の2階に位置するエントランス。現在のチケットはQRコードを入口で認証するタイプの非接触型になっている。検温と手の消毒を行って入場しよう。



歌と音楽と踊りで観る者を魅了するミュージカル。そんなミュージカルの劇場ってどうなっているの？
ここでは、ミュージカル『オペラ座の怪人』が上演中である劇団四季の専用劇場の一つ、JR東日本四季劇場「秋」を訪れ、劇場内部を巡ってみよう。

photos by Yusuke Abe
協力：劇団四季



怪しげで神秘的な雰囲気を醸し出す「怪人の隠れ家」のシーン。

舞台の裏側へ

ミュージカルができてくるまで

歌、芝居、踊りが一体となったミュージカルは、さまざまな分野のプロが集結し、同時進行で舞台が作り上げられていく。今年八月に上演された話題のミュージカル『ジェイミー』がどのような過程で作られたのか、プロデューサーである株式会社ホリプロの井川荃芬さんにお話を伺った。

text by Noriko Hara
協力：株式会社ホリプロ



ミュージカル『ジェイミー』
音楽：ダン・ギレスピー・セルズ / 作：トム・マックレー
日本版演出・振付：ジェフリー・ベイジ

ミュージカル『ジェイミー』の場合

- 1** **企画提案**
井川さんがロンドンで初めて『ジェイミー』を観たのが2018年。「日本でも上演したい!」と会社に提案する。

権利交渉
作品の上映権を持つ権利元との交渉。レプリカ作品かノンレプリカ作品かによって契約が異なる。(『ジェイミー』はノンレプリカ作品)

公演決定
契約が成立し、日本で上演できることに。
- 〈2〜3年前〉

劇場ブッキング

演出家・スタッフ・キャストの選定&オファー
キャストのオーディションを行うことも。



ジェイミー役の高橋颯(左)、森崎ウィン(右)と演出家のジェフリー・ベイジ(中央)。撮影：田中亚紀
- 〈1年半前〉

上演回数・価格決定
上演回数とチケットの価格を決める。
- 〈1年前〉

情報解禁
キャッチコピーなどを作って第一報を出す。
- 〈9か月前〉

台本の打合せ
セリフの翻訳、歌の訳詞の第一稿が上がってくる。

翻訳・訳詞会議
音楽チームと訳詞が歌にうまくはまるかなどを検討。

バクトランスレーションを提出
日本語訳を再び英訳して権利元の確認に出す。
- 〈5〜4か月前〉

チケット発売
このタイミングで制作発表を行うことも。

チラシ制作

セット、衣裳など美術チームとの打合せ



ついにジェイミーがやってくる!
- 〈3か月前〉

台本とボーカル譜をキャストに渡す

歌稽古のスケジュールを組む

上演契約から稽古スタートまで

「誰と一緒に作りたいか」からスタート

初日の幕が開く何年も前から、ミュージカルの企画は動き始めている。今年八月に東京で初日を迎えた『ジェイミー』のプロデューサー、井川荃芬さんがロンドンでこの作品を初めて観たのは二〇一八年のこと。「絶対に日本で上演したい」と熱心に会社に提案し、作品の上映権を持つ権利元との交渉に入った。「海外のミュージカルを日本で上演する際、演出やセットを変えずにそのまま上演するレプリカ作品か、脚本と音楽はそのままに、演出やセットは作り変えるノンレプリカ作品かによって契約が異なります。『ジェイミー』はノンレプリカ作品として制作することにしました」

契約が無事に結ばれると、日本での上演に向けて本格的に企画がスタートする。上演の二〜三年前には劇場のブッキングを済ませ、プロデューサーが中心となって演出家や

スタッフ、キャストを決め、オファーしていく。

「まず演出家を決めるのが第一歩ですが、『ジェイミー』の場合は音楽とステージングとが一体化された演出をしてほしいと考え、演出と振付を同じ方(ジェフリー・ベイジさん)にお願いしました。演出家が決まると、演出補(『ジェイミー』では日本語台本のチェックなどを担当)、演出助手、音楽監督、舞台監督といったスタッフにオファーをしていきます。そして、配役を決めるキャストティングでは、オーディションをすることも。皆さん、何年も前からスケジュールが埋まっているので、早くにお声がけすればするほどベストなメンバーにお願いできるというのがありますね」

制作と並行して広報も

次にプロデューサーがやることは、情報解禁(こういう作品を上演しますという情報をメディアや

SNSなどで発表する)に向けた準備。舞台制作と同じぐらい、広報も初期段階から重要な仕事となる。

「情報解禁の第一報は本番のだいたい一年ほど前ですが、どのタイミングで、どういう風に情報を出すのがベストかを会社の宣伝部とも相談しながら進めていきます。その際に出すキャッチコピーを毎回すごく考えますね。私はいちばん初めに作品を観たときに感じたことをヒントに、「この作品を届けたい!」という思いを込めてコピーを作ります」

上演まで一年を切ると、いよいよ制作現場にも動きが出てくる。とくに海外作品の場合は、歌やセリフを日本語で上演するための入念な準備が大切なプロセス。歌詞と台本の翻訳の第一稿が上がってきた時点で、音楽チームによる翻訳・訳詞会議が開かれる。

「もともと英語で歌われている曲を日本語で歌うので、歌詞が音にはまっているか、ちゃんと聞こえるかを音楽監督たちと一緒に検証していきます。それをもとにバクトランスレーション(再び日本語から英語に訳したテキスト)を作り、権利元に提出します。意識しないとはまら

お話を伺った人

井川荃芬さん
2008年、株式会社ホリプロ入社。6年半のマネジメント業を経験し、公演事業部に異動。数々の舞台作品の制作に携わり、『デスノート THE MUSICAL』をはじめ、『ピリー・エリオット』『メリー・ポピンズ』『スクールオブロック』『スリル・ミー』『ジェイミー』などを担当。近年では世界に向けた「オリジナルミュージカル」の創作を目指し、才能豊かなクリエイターを見いだす「ミュージカル・クリエイター・プロジェクト」を始動、プロデュースしている。

ない部分や、少し変えなければならぬ言葉について、権利元の承認が必要になるからです」

昨今はコロナ禍で後ろ倒しの傾向にあるが、チケットが発売されるのはだいたい四〜五か月前。そのタイミングで制作発表が行われることもあり、公演の詳細が掲載されたチラシも完成する。並行して制作現場では、美術チームや舞台監督らでセットのプランニングに関する打ち合わせが重ねられていく。

そして三か月前には歌稽古に向けての準備が佳境となる。ボーカル譜と台本を完成させてキャストに渡すのが歌稽古の一月〜二週間前。演出助手がキャストなどのスケジュールリングをし、いよいよ本番二か月前に歌稽古がスタートする。